

## ●● 特産農作物点描 ●● ハトムギのこと

## ～故きを温ねて...～

富山県高岡農林振興センター 田尻 俊郎

## 1. はじめに

ハトムギは茶系飲料や各種食品、漢方薬の原料として広く利用されているが、このハトムギ、古来中国の歴史書にしばしば登場し、一部アジア諸国の食生活の中でその有効性と安全性が裏付けられてきた代表的な薬用・食用作物である。

遡ること2,000年前、伝説に残る将軍がその穀実をベトナムから中国へ持ち帰り、朝鮮半島を経て数百年前に日本へ伝来したと考えられている。

粘質土壌地帯においても良く育ち、湿害に極めて強く、稲や麦に比べて光合成機能が高いなどの栽培特性があり、その子実の食品成分は、精白米やトウモロコシ（玄穀）、小麦（玄穀）、大麦（七分押麦）に比べてタンパク質やエネルギーが多く、さらにタンパク質のアミノ酸組成では、必須アミノ酸であるロイシン、メチオニン、フェニルアラニン、バリンなどが精白米やコーンフレーク、小麦（強力粉）に比べて多く含まれる。

国内では、近年様々な輸入食品・食材の安全性の問題から、国産ハトムギへの関心と需要が徐々に増している中、ハトムギを核とした産地間・異業種間の連携振興活動のもと、地域農業の再生にける新たな潮流が芽生えている。

平成21年の国内年間流通量は6,167ト<sup>ン</sup>程度見込まれ、うち国産ハトムギは1,327ト<sup>ン</sup>程度である。平成20年までの国内自給率は1割程度であったが、平成21年にタイ・中国からの輸入が大きく減少する一方、国内生産量の増加により自給率は

21.5%に向上している。

近年、中国やアメリカではハトムギを原料とした新薬の開発が、日本ではハトムギの医薬的効能の科学的解明などが積極的に取り組まれている。

## 2. ハトムギの起原と歴史

ハトムギは植物分類上、イネ目－イネ科－キビ亜科－トウモロコシ連－ジュズダマ（Coix）属に属し、トウモロコシの近縁植物である。1年生草本で、総苞葉は楕円形から長楕円形、花序は下垂し、果皮は脆質である。一方、同属であるジュズダマは多年生草本で、総苞葉は卵形から壺形、花序は直立し、果皮は硬質である。起原地は東南アジアないしインドとされる。ミャンマーでは辺境の少数民族はハトムギを陸稲とともに畑に栽培して、主食として利用している。

和名を「ハトムギ」、漢名を「薏苡（ヨクイ）」、英名を「Job's tear」や「Chinese pearl barley」、学名を「Coix lacryma-jobi L. var mayuen Stapf」という。学名の命名者はフランス人の Romanet du caillaud で、1881年（明治14年）に後漢の武将であった「馬援」の故事が由来とされている。

馬援は紀元前14年から49年に光武帝に仕えた後漢初期の武将として知られ、次のエピソードがある。当時としては高齢であった62歳の馬援が馬に乗って出陣した姿を見て、光武帝が「なんとかくしゃく鬢しやくたる翁よ」と褒め称え、以来、齢を重ねても



様々なハトムギ加工食品



ハトムギの草姿

元気な人を「嬰鑠」と呼ぶようになったと言われる。後漢書の『馬援伝』には、「馬援が交趾（現在のベトナム）に遠征していた頃、いつも薏苡仁を服用し、身が軽くなり、疫病にかからない効能がある。南方の薏苡仁は粒が大きい。馬援はそれを移植するために車一台に満載して帰った。」との記述がある。それまでの中国の在来種はハトムギではなく、川穀（ジユズダマ）であった。中国南部に位置し、ベトナム近くの観光地として知られる海南島には、馬に跨った馬援の銅像が建立されている。

中国に現存する最古の薬物学書である『神農本草経』（紀元前104年、編者不明）にはハトムギの子実である薏苡仁（中国では「薏米」という。）が収載されている。この中で薏苡仁は、「味は甘で気は微寒。筋肉の痙攣や屈伸できない病気、痙攣などを治すことができ、気を下して、久しく服用すると身が軽くなり元気が出る」と記されている。

この学書は、戦国から後漢時代にかけての用薬の経験と薬物学の知識を系統的にとりまとめたもので、収載されている多くの薬物はその後の臨床経験による検証と現代科学研究によって、薬効に信頼性があることが明らかとなっている。全3巻で365種の薬物が収載され（うち252種は植物薬で残りは動物薬や鉱物薬）、上品（君薬）120種、中品（臣薬）120種、下品（佐使薬）125種に分類されている。薏苡仁は副作用など人に障害を与えることがなく、長期間の服用でも心配がないとされる上品の33番目に記載されている。また五味（酸・苦・甘・辛・酸・鹹）、四気（寒・熱・温・涼）にも分類されている。

「神農」とは史記に出てくる中国の伝説上の皇帝のひとりで、百草に及ぶ植物の滋味を嘗めて、その薬的な効用を見分けたと言われる。また「本草」とは薬物が主に草木から作られていたことから、薬草が基本との意味とされる。神農本草経の原本は残っておらず、現在見られるものは明・清代以降に改めて出版されたものである。

### 3. 日本への伝来と普及

日本への伝来は、奈良時代聖武天皇の時に鑑真和上が漢方の処方と薬草種子をもたらした際にハ

トムギもそのひとつとして献上されたとする説や加藤清正が朝鮮出兵の折に半島から持ち帰ったとする説、江戸幕府第八代将軍徳川吉宗公の時代（享保年間1716～1735年）に伝来したとする説など複数あり、明らかではない。江戸時代までは朝鮮麦、唐麦、薏苡、シコクムギなどと呼ばれ“ハトムギ”という名前が使用されたのは明治以降である。

長年、渡来ルートが議論されていたが、最近、（独）農業・食品産業技術総合研究機構九州沖縄農業研究センターがDNA マーカーを用いて、中国・韓国・日本のハトムギの遺伝的近縁度を調査した結果、その系統樹から日本品種は韓国品種と近縁で中国品種とは縁遠であることが明らかになってきた。

ハトムギ生産に関する統計資料は、1970年（昭和45年）に当時の厚生省薬務局がまとめた生薬資料の中に栽培面積2.3ha、生産量4.4トと記載されている。その後、約40年を経た現在（平成21年）では全国832ha程度の農地で栽培され、1,327ト程度が生産されている。

（特産種苗No.3、2009.7【特集・ハトムギ】に日本のハトムギ栽培について詳細を記述）

### 4. 日本の歴史書物に登場

江戸時代に出版された農書に宮崎安貞が40年の歳月を費やし、1698年に編録した『農業全書』がある。本書は当時の主要作物や畜類、約150種の効用・耕作・飼養技術が記述され、耕作技術として種子・土質・播種・収穫・施肥・除草・除虫などが記されている。江戸時代初中期の九州、中国、近畿地方の農耕技術の集大成であり、その卓越性や有効性が高く、上梓以来、江戸、明治、大正時代まで広く流布している。

巻之一から巻之十に分類され、稲や大豆などが記述された巻之二（五穀之類）の19番目に薏苡が掲載されている。そこには薏苡の特性や栽培方法、“レシビ”が記されており、「2種類があつて、ひとつは粒が細長くて、皮が薄く、子実は白く粘りのある糯米のようなもので、薬にも用いられる。もうひとつは皮が厚く、実は少なくて堅い、珠数と呼ばれる。湿潤な土質に適し、肥料を多く施用して、干ばつ時には灌水し、

常に潤いを保つ必要がある。  
 (中略) 9月になってから収穫し、十分に乾燥させる。(中略) その実は薏苡仁と言ひ、薬の一種である。病人の食事に混ぜて食べる。お粥にしたりご飯に混ぜたり、団子にしたり、いろいろな料理がある。葉を米に混ぜて料理すると香りが良い。お茶に葉を少し入れると香りも味も良くなる。」と書かれている。

また、江戸時代の本草学者で儒学者でもある貝原益軒が1709年に編纂した『大和本草』の中で薏苡仁は効能が多く上品の薬であると紹介している。江戸時代末期の1857年には森立<sup>もり</sup>之が『神農本草経・和刻版』を出版している。

## 5. これからのこと

ハトムギは2,000年もの歴史を持つ作物であるが、日本における栽培は盛衰を繰り返しながら今日に至っている。現在は第4期を迎えているが、第3期までは転作作物の選択肢のひとつに過ぎなかったハトムギが、今は地域振興の戦略作物として、また医薬学発展の重要な研究素材として、脚光を浴びている。

農業・農村振興の最前線に立つ“農業普及指導員”の立場からすれば、このハトムギが地域農業を元気づけ、世界を代表する“メジャー作物”に大きく成長することを強く願うものである。



ハトムギの花序

## 【参考文献】

- 石田喜久男：ハトムギーつくり方と利用法ー、農山漁村文化協会（1981）  
 石田喜久男：全国ハトムギ生産技術協議会夏期研修会資料（2008）  
 桑原義晴：日本イネ科植物図譜、全国農村教育協会（2008）  
 手塚隆久：特産種苗No.3、日本特産農作物種苗協会（2009）  
 傅 維康：中国医学の歴史、東洋学術出版社（1997）  
 宮崎安貞：農業全書、岩波書店（1936）  
 浜田善利・小曾戸丈夫：意積神農本草経、築地書館（1976）  
 村上道夫：農業技術体系第7巻、農山漁村文化協会（1981）  
 文部科学省：五訂増補日本食品標準成分表（2005）  
 文部科学省：改訂日本食品アミノ酸組成表（1986）